
享楽と絶望のカプリッチョ設定集

水底に眠れ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

享楽と絶望のカプリッチョ設定集

【Nコード】

N8765R

【作者名】

水底に眠れ

【あらすじ】

享楽と絶望のカプリッチョに登場する兵器等の説明になります。突っ込みとかアイディア大歓迎です

戦艦ヴェニト・ムッソリーニ

コラッツァータ

戦艦ヴェニト・ムッソリーニの建艦に於いては、二次大戦に於いて戦没したヴィットリオ・ベネトーとその前級となる改造旧式戦艦の代替艦として三隻を整備する予定であり、改リシュリユー級であるガスコーニュとフランドルを整備したフランス海軍。並びに、獅子王姉妹と呼ばれるライオン級と守護天使の名を持つセント・アンドリュース級戦艦を擁する大英帝国海軍を拘束するために計画されたものである

しかし、軍縮条約の締結を受け、三隻建造される筈であった彼女達は、一隻はそのまま戦艦として、残りの二艦は空母（アクイラ級）として生を受ける事となる

王立イタリア海軍が持てる唯一の18in砲艦・・・日伊は協力して欧州での最強艦。少なくとも拡大フッドである20in砲艦、セント・アンドリュース級と戦える艦を整備しようと彼らは努力した。これはその結果である

諸元

全長261メートル

全幅38.9メートル

喫水10.3メートル

基準排水量63000トン

蒸気タービン8缶四軸

機関に関しては、重量軽減のためにシフトではなく通常配置を選択している。被弾部位を大きくしないのも、また重要と考えられたためだ

機関出力14600HP

速力27kn（過負荷運転時29Kn）9000海里／18kn

これは実は数字のマジックと言われており、実のところ29ノット以上で戦闘中は振り回せる事は公然の秘密という奴だった。何故ならリットリオは最大30ノットであり、ムッソリーニはそれに追隨する必要があったからだ。

加えて、地中海は海水濃度が低く速力が出やすいというのも考慮すべきだと思われる

各部装甲厚（最大厚部）

司令塔495ミリ

主砲塔前盾495ミリ

同天蓋270ミリ

同側面250ミリ

バーベット480ミリ

舷側406ミリ（傾斜11度）

水平289ミリ（上甲板36ミリ＋中甲板18ミリ＋装甲甲板225ミリ）

ちなみに、大和は312ミリ（最上甲板38ミリ＋中甲板25ミリ＋装甲甲板（230＋10）ミリ＋弾片防御甲板9ミリ）である

武装

九四式・18in四十五口径三連装砲三基（最大射程60キロ、通常42キロ、1.8発／分）

新型戦艦を建造するにあたって、何故大和級のお下がりである砲が配置されることになったのかは、当時日伊共同で開発中だった新式18in砲を搭載した場合、不具合が発生すると、大和級の代わり紀伊級が存在する帝國海軍との比較がよく言われている一枚看板である以上、動けませんというわけにもいかないというわけだ

OTOMod1950・6in五十五口径三連装砲四基（最大射程25キロ、20発／分）

OTOMメララ・5in五十四口径単装高角砲八基（最大射程15キロ、45発／分）

アスピーデ対空ミサイル発射基二基八発（最大射程50キロ、同時誘導二発）

メロカ・20ミリ120口径連装機銃十基（最大射程9キロ750発／分）

なお、全てのデータは砲一門に付きの発射速度である

乗員2300名＋司令部30名

特殊装備・機関室にピザ釜、ピアノ類の楽器一式（ムッソリーニ家が音楽一家の為である。レーヴァテイルも優先的に配属されているが、音楽設備と彼女らの声で本格オペラが直に聞けるのもこの艦だけである）

艦のモットー

アバンティ！（イタリア語で前進！の意、ムッソリーニの発行して
た新聞からとられる）

数字のお遊びに近いが補足として、片舷に指向の副兵装を、おおよ
そ20年前の装備に置き換えて見るとこうなる（あくまで目安です、
悪しからず）

Mod1950の6in・片舷二基六門、分あたり120発↓三年
式6in三連装主砲八基分

OTOメララ127ミリ片舷四基四門、分あたり180発↓九六式
10センチ連装高角砲約五基分

メロカ・20ミリ連装機銃、片舷五基十門、分あたり7500発↓
ボフォース40ミリ四連装約十二基分

やあ（・・ω・・）

まずこの弾幕はサービスだから受け取ってほしい

うん、技術革新なんだ。すまない

ただ、もし単艦で向かってくるこのムッソリーニを見た時、何とも
言えないヘタレ感を名前から君達に感じて欲しかったんだ
それじゃあ、纏めてスイスチーズになってもらおうか

とまあ、かつての一個水雷戦隊なら単艦で阻止しうる火力を保持している

また、艦体は大和級を踏襲しつつも、武装配置は三番砲塔をリットリオ級のように高くはしていない（ヘリ・短艇格納庫が整備しているため）以外は踏襲している

加えて、リットリオでは片舷六基あった高角砲を四基に減らし、間隔を空けることにより被弾時の二次被害を防いでいる。また、船体内も副砲廓により仕切られており、防御力を増している

誘導弾も船体に弾庫を入れるような事をせず、外置きの八発のみで弾庫は無い。船体表面近い部位に火薬・燃料の固まりを埋め込み設置する酔狂は、この世界にはあまり存在しない

＜＜搭載砲弾について

核砲弾の定数は一斉発分の20kt弾頭の9発である。艦船に対する危害半径はおおよそ四百メートル

。他に、時限信管を切つてある鋼球を詰めた対空榴弾を十斉発分の90発。

対空砲弾として大々的に採用したい所だが、鋼球の威力維持に特殊金属を使っており、核の次にコストがかかるため、使用すると財務がうるさい

通常徹甲弾40斉発分360発

重量徹甲弾（SHS）30斉発分270発

通常榴弾30斉発分270発

星弾三斉発分27発

計1026発

が定数である

戦艦ヴェニト・ムッソリーニ（後書き）

感想・ご意見等お待ちしております

フロン級対空軽巡

フロン級に関する建艦事情

1960年代、イタリア海軍は空母を保有したために、艦隊、ひいては対空能力の強化に力を入れていた。この時誕生したのがエトナ級対空大型軽巡である。

エトナ級要目

基準排水量7500トン

全長180メートル

全幅19メートル

機関73000馬力

速力30ノット

武装

OTOメララ5in連装高角砲×5

OTOメララ3in単装高角砲×4

メロカ・20mm120口径連装機銃×4

かの艦に装備された兵装は、元々単装であった砲架を改造したOTOメララ127ミリ連装砲の五基を中心線上に背負い式に配置し、かつまた同社の76ミリ単装砲四基を舷側に配置、機銃と共に近接

火器とした。

その姿は二次大戦中の米海軍アトランタ級、あるいは英海軍のダイドー級の流れをくむ、帝國海軍が整備を始めていた青葉級対空大型軽巡、あるいはフランス海軍の防空軽巡ド・グラースに大きく影響を与えられたものとされる

エトナ級は海軍に引き渡されてからの運用実績も良好であり、イタリア海軍はその性能に大きく満足した。しかし、彼女達を不満に思う一派も存在した。彼らは、砲を連装化した事で経戦能力こそ強化することには成功したが、即応（初弾の出が多少遅い、旋回速度も）力で劣り、高速化が進む航空機に対し、のではないかという面々だ

ではどうしたら良いのか？ならば、出来るだけ軽くて取り回しが効く物を代わりに出来たら良い、一発一発の命中率が高い物なら尚更だ・・・そこで選ばれたのが、当時開発が進んでいた対空誘導弾を搭載することだった。

しかし、フロン級がすんなり現在の姿に落ち着いたわけではない。一つは艦のレイアウトだ。結果として各砲塔に連装発射基を設置することに落ち着いたのだが、防弾・・・砲弾よりよほど危険なのを言うまでもない。その為、前部発射基の内一基を撤去し、各発射基の間隔を空け、ダメージコントロールしやすいようにしたいという要望があったのだ。それに加えて、誘導装置の増設を行い、誘導性能の向上を計ろうとも、その派はしていた。しかし、発射装置のレイアウト変更は設計に大きく関わる問題であり、建艦計画が大きく狂ってしまうこと。誘導装置の高性能化による高コスト化、そして軽巡程度の船体での防御にリソースを割く余裕の度合いから、この改設計は没になってしまうのである

そしてもう一派からも横槍は入った。フロン級のヘリ巡洋艦建造派

の存在である。彼等はアキラ級大型正規空母以外のヘリプラットフォームも欲しかったのだ。これぐらいの船体があれば、格納庫付きで6機は運用できる。空母飛行隊で、対潜・人員輸送・A E W・対艦・対地支援と、ありとあらゆる運用を8機体制でやっているヘリ運用のハードな負担を、少しでも緩和できたらと考えたからだ。

しかし結局のところ、彼等の意見も退けられた

理由は、計画が立案されていた1960年初頭に、日本海軍とともに行われた潜水艦予報事件が、普及が割と進んでいたテレビで、大々的に報道された事に端を発する。太平洋、北極海、地中海に存在する殆どすべての英仏の潜水艦の所在を、余すところなく暴露したばかりか、針路を予測して入港まで放送し続けたのだ

レーヴァテイルの聴音による最大のデモンストレーションの結果は、地中海からの英仏潜水艦全面撤退。北極海における戦略原潜のシフト見直しと前線の後退、原潜の建造予定のキャンセルである。地中海で対潜する相手がほぼ消滅してしまったのだ

A E Wや人員輸送に関しても、順次リットリオ級が改装に入ったことや、ヘリ搭載甲板のある偵察艦の就役開始ので要らなくなってしまった、ヘリ巡洋艦の必要性は希薄になってしまった

かくしてフロン級対空軽巡と名付けられたかの艦は、予定通り単能力艦として誕生するのである。現場での評価はエトナ級に引き続き上々、しかし五基という発射基と誘導装置の設置のせいで、各弾庫には16発しか搭載できず、経戦能力に疑問が出るといふ、本末転倒な不満が出たのであるが

海軍上層部は、それならば、と、エトナ級とフロン級を組ませて運用することで、お互いの欠点をカヴァーしよう考えた

かくして両艦は、一組のペアとして戦陣に轡を並べるのであった。後はコンバットブルーブンを果たすのみ。そして、その機会は訪れ

るのである

建造数

エトナ級（2隻）

エトナ・ラハール

フロン級（2隻）

フロン・プリニー

命名は火山関連の用語から、あーかいっーきーあかいっきー

ガロファノ級

1960年代、大日本帝国海軍で水上艦の圧倒的優勢を元に潜水艦部隊の減勢が進められていた頃、イタリア海軍はというと、第二次世界大戦時に譲渡されたレーウ・アテイルの少なさから、絶対的に彼女達の数の不足が取り沙汰されていた

『主力艦にレーウ・アテイルを配する事は成功したし、日本から供与された高性能のソナーを随伴艦艇各艦に装備することも出来た。しかし』

帝國海軍が誇る音姫、レーウ・アテイル程の正確な探知は期待できそうに無い

『だから、日本ほどの潜水艦の減勢は出来ようもない』

『だがな、この地中海という戦場、どうした所で海峡を挟むとなれば、潜水艦に何の意味を持たせるというのだ』

そんな事をするよりも、水上艦を増やして、主力艦の水中への矛であり、盾に用いた方が良いのではないか？という意見も、また支持を得ていたのだ。そこに

『ちよつと待つてほしい。もし、潜水艦をあまりにも減らし過ぎた場合、フランス海軍の艦艇から対潜装備の数を減らし、対艦兵装を増強させてしまう恐れがあるではないか』

日本はそれで良い。英海軍が仮にそうなくても、数の優位は変わらないし、フランス領インドシナ他に展開せざるを得ない仏海軍も、無視は不可能だ。英仏の海軍が手を合わせて、ようやく対抗出来る。それが日本だ

『その上でむしろ我々がとるべき道は』

条約で決められたのもあるから、追加建造はもはや出来ないが、V・ムッソリーニとリットリオ級戦艦という高性能戦艦で、敵に無視できない力を保持し続ける事と同じように、敵に無視できない、高性能潜水艦のいくらかを保有し続ける事ではないだろうか

『今まで前大戦型とはいえ100隻を越えていた保有潜水艦は明らかに処分すべきですが、16隻ぐらいで新型を保有するのは妥当だと考えます』

『16は多いだろう』

誰かが突っ込んだ

『東西に8隻、二個戦隊、正直あと8隻欲しい所ですよ。戦隊の数を3隻にし、三交替制にすると18隻、最低ラインですよ16隻は皆が唸った』

『2隻二交替制で8隻、隻数削減の代わりに原子力で展開海域の拡大や交代回数を減らすのはどうか』

『駄目だ駄目だ！地中海を放射能汚染させる気か！』

それにはほぼ全員が理解を示した。この海じゃ自浄作用が小さすぎる。死の海になってしまう

『では、通常型の大型化で納得するしかありませんな』

そんなこんなで喧々囂々の協議がなされ、結局、12隻が整備される事が決定。1960年代初頭から整備が開始されるのである

『命名はどうしようか？イタリアにとって、ある意味新しい世代の潜水艦であるが』

『そうだな・・・』

ガロフアノ
Garofano級潜水艦

基準排水量2200トン

全長66m
全幅・全高8.8m
最高速度・水上15kn／水中18.5kn
魚雷発射管6門／魚雷搭載数24発
最大潜航深度230m
乗員78名

- 1番艦Garofano(ガロファノ、撫子)
- 2番艦amarilli(アマリリー、アマリリス)
- 3番艦olandesebianco(オランダセ・ビアンコ、シロツメクサ)
- 4番艦violetta(ウヰオレッタ、スマイレ)
- 5番艦crocus(クロクス、クロツカス)
- 6番艦violadelpensiero(ヴィオラ・デル・ペンシエロ、パンジー)
- 7番艦bellflower(ベルフラワー、桔梗)
- 8番艦Narcisso(ナルチソ、水仙)
- 9番艦amarillidi grappolo(アマリリー・ディ・グラッポロ、彼岸花)
- 10番艦cardo(カルド、あざみ)
- 11番艦girasole(ギラソーレ、ひまわり)
- 12番艦magnolia(マグノリア、木蓮)

レーウ、アテイルの耳による水中雑音と抵抗を抑える技術として、

日本がイー600級で採用した涙滴型船体をイタリア海軍も参考にしてガロファノ級潜水艦は建造され、フランス海軍で建造されつつあったダフネ級潜水艦を圧倒する性能は、フランス海軍を一時パニックに陥らせるのである。この性能に満足したイタリア海軍は、後期型ガロファノ級（通称、ガロファノB級）と呼ばれる8隻の建艦を行っている。享楽と絶望のカプリッチョ時点では、4番艦、アネモネまでが就役していた

ガロファノB級

1番艦 *Camellia*（カメラリア、つばき）

2番艦

Vite（ヴィテ、ふじ）

3番艦

Fuyang（ファン、芙蓉）

4番艦

Ane^{アネモネ}mon^ネe

ガロファノ級（後書き）

4番艦までなのは、私が思いついた花の名前がそんなくらいだったためではアリマセンヨ？（遠ひ目）

まあ、ぶっちゃけ史実バーベル級改みたいなもんです

エトナ改級軽巡

某日・タラント軍港

『うむ、典型的な対空艦であるな！』

港に停泊している艦を見て、百目鬼大佐は子供のように笑った

『しかし、あなたが海軍艦艇に興味があるとは思いませんでしたな』
これは玖部大佐の言だ、大使館の駐在武官の長である二人が連れ添うことは珍しい

『違うなあ、あんな化け物と戦えるってのが興味深いのさ。そこでさ、こいつを改造したいんだが、無理かな？』

『・・・改造の具合によるんじゃないんですか？』

掛かる手間と時間、この艦はペアであるプリニーを失っているので、編成上の鬼子になっている関係上もあり、やりやすさからうが

『艦はあんまりいじらない、砲内筒を取り外すだけだからな』

『ははは、ご冗談を、そんなことをしたらライフリングがなくなつて正確な砲撃が出来なくなってしまう』

ありえないと玖部は肩をすくめたが、百目鬼は笑わなかった

『海軍は先の遭遇で二回ほど近接戦闘を強いられたと記憶しているが？』

『ええ、まあそうです』

一度目は核砲弾を使用する羽目になり、二度目はムッソリーニを囹に皆でタコ殴った

『こいつに有翼被帽撤甲砲弾（APSFDS）を使わせるんですよ、敵との距離は六千から四千の間合いを想定してね』

『たしか、新型の戦車砲弾として開発されていたものか？』

こちらの戦車の備砲が90ミリ砲なのに対して、英仏独がそれ以上

の口径を搭載した戦車を主として装備しはじめている事への小細工
『空気抵抗を減らし、とてつもない高初速をもって装甲の概念すら
超越したそれです』

ただ、回転はその威力発揮の阻害となる。だからライフリングは撤
去しなければならぬ

『命中精度もその程度の距離であれば無意味です、撃ったその時に
は既に命中といった形になりますから』

最初の照準さえ正確に出来るならば考えなくていい

『しかし、かの砲弾は爆発したりするものではないと聞きますが？
それではただ刺すだけになってしまう。爆発させて傷口を広げな
ければ

『玖部大佐は注射は大丈夫な方ですか？』

『ん？刺すだけだからな』

百目鬼は笑う

『それが十本なら？それが例えば百本ならば？』

『・・・分225発だ、片舷の3in砲も加えるなら300発、な
るほどな』

それなら、意味があるかもしれない

『ああそうか、例の陶器装甲を貼るのも、内筒を外すことでの重量
軽減と相殺できるわけか』

うまく出来ている

『あとはやるかどうか、です』

百目鬼はイタズラっぽく笑う、まったくこの男は

その、日本大使館側からという馬鹿げた提案に、伊海軍当局側も困
惑した。彼らにも彼らのプランがあったからだ

新式の152ミリ53口径連装砲への換装計画である

純粋な砲戦力の強化、実にオーソドックスであり、伊海軍当局の思考はまっとうなものである。単艦での運用が必要とされるなら、改装を行うならば、なんにしても現状より強くあらねばならぬ、その意志の具現化である

いや、本来であればこの砲こそがエトナ級には搭載されるはずだった。だが、なされなかった。出来なかったのだ。

この砲は意欲的なもので、分15発の発射速度はこの口径で世界最速（史実ウースターより三発早い）のものだったのだが、あまりにも反動が強く、対空にも遠距離射撃にも不向きであったからだ

だけれども、今現在イタリアが戦っている相手は対空だの遠距離砲戦だのに上品に付き合う必要は無い。それは戦艦に任せれば良い・
・いや、実際の所戦艦以下の砲艦が価値を低下させている現状ではかなり問題であった。そして、暴発的な発射能力と砲弾本来の徹甲スタンビードとしてのちの爆発は当局にとって魅力だった。

そしてそれを決定すべき海軍上層部は悩んだ挙げ句、更に高位決定機関へと問題を棚上げした

ドゥーチエ・ヴェニト・ムッソリーニ本人に

エトナ改級軽巡（後書き）

感想・ご意見等お待ちしております

といたしますか、どっちが良いかありましたらどうぞ遠慮なくご意見を

対空効率について

これは、乙女社の回し者として、どっかで見た76ミリのメララが30°範囲の三目標を撃破可能な事を信じ、いろいろ割り出してみますた

んで、現代海戦の機動部隊の常として前衛部隊を置き、その後ろに機動部隊を置く形になる事を鑑み、主隊としてイタリア海軍の前衛部隊がどのくらいで飽和するのかをやってみまっ

まず、算定に必要な前衛部隊の戦力確定を

戦艦×2

重巡×1

対空軽巡×1（今回はラハール想定）

駆逐艦×4

偵察艦×4

と確定します。なお、敵対姿勢の関係から、武器は片舷に指向出来るもののみカウントします

リットリオ級

主砲・遠距離対空射撃（ベアリング弾）で各砲塔二発のミサイル撃墜見込み、よって六発

副砲・前後の艦橋部へ着弾せんとするミサイルを、近接ベアリング

（発射直後に散開）で迎撃、各砲塔一発の撃墜見込み、二発

高角砲・76ミリOTOメラ五基（一基集中を防ぐ為撤去）、よ
って十五発が撃墜見込み

対空ミサイル・据え置き八発、命中率を六割に設定、四発撃墜見込み

機銃・各機銃座一基ずつ、五発の撃墜見込みを設定

合計三十二発

ヴェニト・ムッソリーニは127ミリ四基で十二発だけでも、射
程が長いので撃墜効率を1.2倍に設定、十四発、三十一発戦艦二
隻合計六十三発

対空^{ラハール}軽巡

127ミリ高角砲・五基、十五発の1.2倍、十八発

76ミリ高角砲・二基、六発

機銃座・五基、五発

二十九発

重巡

主砲・戦艦副砲と同じ、四基四発

高角砲・四基、十四発

機銃・三基、三発

二十一発

駆逐艦

主砲・127ミリ単装三基、よって十発を撃墜見込み

機銃・軽機銃座の為、一発の見込み

四十四発

偵察艦

主砲・76ミリ連装二基、六発を撃墜見込み

対空ミサイル・弾庫つきの連装一基、弾庫には16発。うち8発を使用するとして、命中率六割の四発

機銃は駆逐艦と同じく、一発と見込み

四十四発

合計二百一発、であるものの、同一目標への攻撃等の混同があると思われるので、撃墜効率を六割（この効率を上げるのがリンクシステムであり、水鏡・アイギス機構になるのだが、現在は考慮しない）に設定、百二十発とする

サンバーン相当の高速ミサイルの場合は、またこれの半分とする

前衛部隊を突破し、一発でも対艦ミサイルを命中させるには、無傷のF-2を30機、つまり二個飛行隊以上か、護衛艦十五隻、ひいては二個護衛艦隊を持つてこないとお話にならないという結果になります。これに本来であれば、チャフやフレアによるソフトキルがさらに加わるんで、ホントにしゃれにならん事になります

高速ミサイルの場合も、その運用の難しさや誘導の困難さから、弾頭の多くに核でも使わない限り艦隊を撃破する事は難しい。と、断言するものであります

まあ、後ろに控えている空母からの戦闘機による迎撃を考えると、本当にありがたいございますという状態になることがご理解いただけるかと思います

ちなみにイージス艦（いじすかん）は

主砲で三発、VLSの中身で半分が対空用でしょうからその三分の二、三十発から八割命中で二十四発、CIWSで二発、二十九発が妥当なところじゃないでしょうか？まさに対空軽巡でありますな

対空効率について（後書き）

感想・ご意見等お待ちしております

素敵なドクトリン

私の今現在書いてる唄う海から享カプ、アイドルは一つの繋がりを
持つ世界です。

その上で考えなきゃいけないのは、その世界で海軍はどのようなド
クトリンを持つのか、という事になります。今回はこれの説明を行
います

私がこの世界で帝國海軍が現代は保持すべきドクトリンとして作っ
たのは、2つ。

一つは、戦艦が有用なままどころか、戦争のケリをつけるような海
戦をし、生き残っている事から生まれた、核砲戦ドクトリンです。
まあ、核砲弾のパイ投げやりながら戦うには、どうしたらいいのか
？という至極単純なドクトリンなのですが、史実どおり核実験によ
り、酒匂が距離400メートルの地点で大破炎上の後、一日後に沈
没したのを戦訓として、射撃された敵核砲弾に対して、着弾までに
400メートル以上の距離をとれる速力を戦艦に付与する事です。
400メートルでは結局炎上して沈没してしまうのでは？と考えら
れるでしょうが、軽巡と戦艦は違いますので、許容範囲と思われま
す。倍の距離で水中爆発であった史実クロスロードでの長門は、開
口部の被害こそいわれますが、浸水を停止する乗員などがあればま
ず間違いなく生存できるものとされていました

戦後の日本戦艦は間違いなく大和級に似た艦橋構造物を持つようにな
ります（元々これまでの進化版であることは、比叡を見ればわか
る）ので、被害は史実より抑えられる事は間違いありません

では、敵艦が発砲してから400メートル以上稼げる速力とはなんぞや？

核砲弾が投射されるような、時代になりますと、現代砲兵に不可欠な対砲リーダーが各艦に配備されます。撃った瞬間から落下地点が予測され、1分後には落着する。つまり、落下予測円から舵を切る、あるいは直進して危害半径である400メートル（つまり最低800メートル）を越える速力があれば良い・・・単純に計算すれば0.8キロ×60分÷1.85≒25.9ノット・・・かかったな、アホが！

ではなく、艦体長を足した

$1 \times 60 \div 1.85 \parallel 33 \sim 35 \text{Kn}$ あれば、核砲弾の弾着地点をわざわざ通過しても回避が可能となるわけです。通常のように舵を切る事を考えるならば、30knぐらい、多少燃える事を許容するなら最低でも26kn強あれば事足りるでしょう

しかも、帝國海軍には、スクリュー・船体の最適化に定評のある異世界の歌姫、レーヴァテイルが居るので、近代化改裝時に缶の取り替えさえ行うならば、帝國海軍は保有する全戦艦を核砲弾のパイ投げに対応した戦艦にすることが可能となるわけです

実際、史実長門級は改裝で29knになる計画でしたし、大和級らが33knくらいにされるのはお約束みたいなもので、荒唐無稽とまでは言えないものです

あとは、放射能洗浄装置に、リペアの乗組員を1セット用意したことで、核砲戦は実現可能なドクトリンとして帝國海軍は採用したわけです。

まあ、同盟国であるイタリア海軍ですら

『あいつら、宇宙人とも戦うつもりか？』

とどん引きされております

そして問題は、海戦のもう一方の雄、空母の方になってきます

今現在の史実として、米海軍の空母がフロム・ザ・シー、というドクトリンで運営されていることは、良く知られています。簡単にいえば、海洋からどれだけの戦力（火力）を投射できるか、というのが問題点とされるドクトリンです。このドクトリンは名前や手法を変えてこそありますが、朝鮮戦争以来、全く変わっておりません。理由は簡単です。なぜなら、もはや帝國海軍が存在しないからです。米海軍にとってまともに戦える、あるいは戦えた海軍は帝國海軍以降いまだ存在しません。

これは持論でもありますが、空母一隻沈めると引き替えにほぼ消滅してしまう予定の旧ソ連、そして中国海軍は相手にすらならない存在です。

彼らの選択した潜水艦による通商破壊ドクトリンは、二度の大戦で完膚無きまで敗北、破綻しており、戦略核の投射能力以外の効力を持ちえません。海は常に米海軍の主導権があり、これが動く事はほぼ100%ありえませんが

では、翻って唄う海以降の水底世界はというと、日本とイタリア、イギリスとフランスと、現・米軍なみの大型空母を多数運用し、大規模戦闘に入る可能性が大いにある世界です。フロム・ザ・シーに入る前に、空母は海戦に勝利するという一仕事をしなきゃなりません。

では、どうしたらいいのか？

こうなると、各国のバックグラウンドが重要になってきます。そして、注目すべきはその時最大の戦力を持つ海軍のやり方です。なぜなら、最大でない海軍のやり方が主流となった場合、大きい海軍は最大でない海軍のやり方をする部隊を同数保持すれば一応対応出来ると共に、自由に使える差分で相手を殴る事が可能だからです

ですので、この世界での海軍ドクトリンを決定づけるのが、帝國海軍が造り出したドクトリンとなるのに、納得いただけると思います

そして彼らは、空母を攻撃戦力として運用することを放棄します。何故なら別の攻撃力・・・優勢な戦艦勢力を保持しているからです。決着は彼らが作れば良い。見栄えも良いし、沿岸都市に彼女達が現われて砲撃されるなんて事になるなら、その戦争はあきらかに負けだとその国の国民に認識させることが可能だからです

オール・ファイターズ・キャリアー・ドクトリン。これが、この世界での空母が持つドクトリンです。

帝國海軍の空母部隊は負けないための盾であることを選択したわけです。

では、仮に艦載機を80機を搭載できる空母が一对一で戦うとしましょう。

片方は全部戦闘機です。一方は、半分半分としてみましよう

それでは、戦闘を開始します。まず最初に攻撃機を含む側から攻撃を行わせてみましょう。当たり前の話ですが、全機攻撃は出来ないで、20機の攻撃機に護衛の戦闘機20機、一方受ける側は40機の戦闘機によって守られていると仮定します。

どっちが勝つか考えるならば、20機の護衛機を20機の直掩機が相手どり、残りが攻撃機に襲い掛かります。もしかしたら、もう少し攻撃側の戦闘機を増やした場合なら、何機か通り抜けられるかもしれない。攻撃機を落とすにも時間がかかりますし、襲い掛かる機が少数機になればなるほど攻撃効率が下がりますので。ですが、その先に待ち受けるのは絶望です

この世界では、大型の砲戦艦艇が大量に現役に残ると共に、対空ミサイルのみならず、砲煩兵器にも大量の予算が投じられており、エリアディフェンスはともかく、ポイントディフェンスの火力、そしてそれを維持するだけの防御力が現実よりケタが違うからです。

では次に、オールファイターズキャリア側が攻撃側に回ったとしましょう。攻撃側はまともな対艦攻撃能力を保持しておりませんので、敵空母の能力喪失・・・敵艦載機の切り取り、つまり、ファイトースイープを目的とするでしょう

同じく半数攻撃として、40機に、直掩の40機の戦いとなります。この場での勝負はつかないでしょう。あるいは攻撃側が押される展開になるでしょうが、一方的な展開にはなりませんでしょう。仮に、攻撃側が10機、防御側が5機の損失とします。

この時点で70機の戦闘機対35機の戦闘機+40機の攻撃機として、第二次攻撃は攻撃側40機対防御側35機の戦いとして互いに10機の撃墜とします

この時点で60機の戦闘機対25機+40機・・・まだ攻撃側は40機の直掩が出せるので防御側は攻撃出来ません。攻撃側はさらにスweepしにやってきます

40対25、これでも防御側が奮戦したとして互いに10機落としたとしましょう。攻撃側空母には50機の戦闘機が残り、防御に十分な40機を保持しており、防御側が攻撃なんてもってのほかです。しかし、次のファイタースイープを受けた場合、40対15機で戦うことになります。攻撃側がほぼ三倍で殴りかかってきます。もうやりようがありません

しかも、ここまで見てきていただければおわかりかと思いますが、防御側直掩はずっと同じ機がずっばりであり、攻撃側と較べて明らかに疲労の度が違ってくるでしょう

この時点までの戦闘で戦闘機の損耗率は攻撃側37%に対し防御側62%となり、オールファイターズキャリアーとは、通常の空母より約二倍ほど戦闘効率が良いとなるわけなのです

ですので、享カプでも、仮に第三次世界大戦が勃発した場合、一期はどうしても欧州で孤立するイタリアも日本と同じくオールファイターズキャリアーを採用しており、以下の飛行隊をアクイラで運用しているので参考いただきたい

アクイラ飛行隊編成（1964年）

五個戦闘飛行中隊（旋風・9×5）

三個遠距離戦闘飛行中隊（旋風・9×3）

一個偵察飛行中隊（崔雲・4×1）

一個対潜・救助飛行中隊（アグスタA103・8×1）

合計84機

戦時には、さらに予備として一個戦闘飛行中隊を増載。この数は、二次改装後の信濃級にやや勝り、三次改装（烈風や、後の碎風（トムぬこ相当）に合わせて拡充が行われた）後にやや劣る数である

ちなみに戦闘飛行隊の遠距離とは、直掩を常時行い、敵編隊が艦隊に近づく前に先行して遠距離で空戦を行う部隊の事で、比較的ウエテランが配属されているが、戦闘飛行隊がその任に就く事もままあり、特に変わりはない

と、つらつら数字や根拠っぽいものを挙げてまいりましたが、まあぶっちゃけ、水底世界の海軍は巨大な盾を装備して、物理で殴る、あるいは押し潰すがデフォルトなんだな〜と理解してもらえたらこれ幸いです

素敵なドクトリン（後書き）

感想・ご意見等ありましたらどうぞ

愛すべき馬鹿の履歴

霜島初の経歴

私、アキラ艦長ウ、イエステは、今回我が航空隊が大規模な損害を被った事により、その再編の資料としてこれを閲覧するものなり

霜島初 (Shirusu Shimojima) 1944年生まれ、22歳。実家は神社、家族構成は母一人と双子の妹の三人、異母兄として志摩直純 (Shima Naozumi) がある

1960年、家計を助ける為との理由から大日本帝國海軍海兵団に入隊と共に予科練の戦闘機コースを希望

1962年、全ての履修科目を修了し (この時点で飛行時間400時間)

二飛曹 (Capo di 3 Classe、曹長相当) として鹿屋空に配属、2年間の間は通常任務 (年間飛行時間300時間)

1964年には中国大陸で戦闘参加、一度の戦闘で敵機を5機撃墜 (撃墜2、共同撃墜3)。大日本帝國海軍新造空母、隼鷹航空隊の要員として錬成開始

同年、一飛曹 (Capo di 2 Classe、上級曹長相当) に昇進。隼鷹航空隊、イタリア海軍空母航空隊の指導の為、チベツト・イラン・トルコ経由の長距離輸送飛行で移動。隊は分割、霜島初は王立イタリア海軍第二艦隊、空母アキラ航空隊の指導にあたる (同年飛行時間190時間・移動時間除く)

彼の航空隊での役割は、あいつらは日本人だから出来るのであって、我々が出来るわけがないという言い訳をさせないための、隊の中にいる不完全な人員である

その生来の性格も日本人としては軟派な性格であり、我が方の人員と訓練をするにあたって打ち解けやすい人物であることが望まれた。いわゆる良い警官悪い警官等であるような典型的な愛すべきバカ、である

彼の役割は今までそうだった。しかし、我々の航空隊を教導すべき練達の日本人パイロットは失われた。そのうえで実戦経験があり、訓練による飛行時間を含めて1190時間を越える空母航空隊の戦闘機パイロットをほうっておく余裕は無くなったのだ

我々のパイロットは、年間250時間（フランス230時間、イギリス275時間、いずれも海軍飛行隊）同年代のパイロットより一回りは技量に優るのだから

小隊長任務についたことは無い。だが、ヘルシアの護民官、エミリア・ツイスカをはじめとする人員への航空教練、自身の給金の五割を実家へ郵送、三割を娼館（身体関係だけでなく、不遇な境遇の娼婦とただ遊ぶだけに使っているようだ。ツケがかなり貯まっているようだ）、彼が追い出されずに遊べるのはその点があるからのようだ）としているあたりからも、ある程度の数の部下を持たせたとしても、その能力を期待できると思われる

なお、日本に於ける隼鷹飛行隊として、我が海軍でも次期主力艦上

戦闘機に採用、ライセンス生産が決定している烈風の搭乗訓練を経ている

大日本帝國海軍に於けるパイロットランク乙（注記・甲は飛行時間2000時間越え、夜間作戦実施可能な技量）

愛すべき馬鹿の履歴（後書き）

感想・ご意見等お待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8765r/>

享楽と絶望のカプリッチョ設定集

2011年9月17日10時47分発行